



日本麻酔科学会第65回学術集会
共催セミナー「L13」

RADIOMETER 

周術期管理における バーコードの活用による 医療安全の向上

【座長】

山田 芳嗣 先生

(東京大学医学部麻酔学教室・附属病院麻酔科)
・痛みセンター 教授

【演者】

祖父江 和哉 先生

(名古屋市立大学大学院医学研究科麻酔科学)
・集中治療医学分野 教授

【日時】

5月18日(金)

12:30 ~ 13:30

【会場】

第8会場

(パシフィコ横浜
会議センター 5階 501)

事前予約を行っております。会員の方は会員HPよりご予約ください。
非会員の方の事前予約は行っておりませんので、ご了承ください。

共催：公益社団法人日本麻酔科学会 / ラジオメーター株式会社

周術期管理におけるバーコードの活用による医療安全の向上

【座長】山田 芳嗣 先生（東京大学医学部麻酔学教室・附属病院麻酔科・痛みセンター 教授）

【演者】祖父江 和哉 先生（名古屋市立大学大学院医学研究科麻酔科学・集中治療医学分野 教授）

医療における安全性を向上させていくことは、医療者従事者にとっては重要な課題である。
周術期におけるエラーは重大な事例となりやすく、麻酔科医は医療安全に感心を持つべきである。

例えば、薬剤関連の様々なエラー（広義の誤薬：以後、誤薬）により障害や死亡が生じるが、2014年の学会の調査では、多くの施設が注射器に薬剤名を手書きしているという事実が明らかとなった。残念ながら麻酔科医の意識が高いとは言えないのが現状である。

エラー防止のために、現場での対策は重要である。頻繁に行われるのは「ダブルチェック」だが、「人対人」のチェックの効果には限界があり、「システム対人」が理想である。「システム」の代表として、バーコード等の＜自動認識技術＞がある。バーコードは、医療業界でも活用が進みつつある。

特に医薬品は、2006年に出された厚生労働省医薬食品局安全対策課長通知『医薬用医薬品へのバーコード表示の実施について』等により一部義務化され、「トレーサビリティ」目的で表示が進んだ。一方で、「医療安全」目的の利用は、患者確認・輸血確認等で行き入れられているが、不十分であり、さらなる活用法が考えられる。

当院の手術部・集中治療部では、バーコードによる安全対策を行っている。誤薬防止のために、バーコードによる吸薬から投与までの薬剤確認、麻酔記録への自動記録を実現した。また、血液ガス分析 (point of care testing) の際、検体と患者とのマッチングをバーコードで行っている(ラジオメーター社 AQURE FLEXLINK)。本システムにより、分析結果を間違った患者に登録するエラーが減少した。

今後、バーコードの医療安全における活用はさらに広がると考える。また、RFID (radio frequency identification) は、アパレル業界やコンビニ業界では実用化しており、医療業界でも活用が進む可能性がある。

【 Memo 】